ギリシアの抒情詩と歴史

芝川　治

序

ギリシアの前古典期は、通例、貴族の時代とされる。そこでは閉鎖的身分秩序が確立して、貴族が支配し平民が従属したというのである。その点においてそれは古典期の政治、社会とは構造を異にするとされるわけである。かくなる理解が正当たるか否か、筆者は、近年、詩歌の研究を通して問うてきたところである。前古典期には抒情詩やエレゲイアなど多くの詩歌が制作された。抒情詩等の詩人が輩出したのである。その点で、この時期は「抒情詩の時代」と称される事[1]もある。史料の現況に鑑るに、これら抒情詩類には貴重なものがある。それらは文学作品とは雖も、当時における政治、社会或は価値意識の実相を窺知せしめるものがある。史的観点よりすればそれらは該時期における稀少なる同時代の文献史料なのである。それらの用語法や思考に通暁しない場合、歴史認識においても謬説に陥る虞れが生ず。当然至極であるが、吾人としては確実な史料より出発しなければならないのである。

筆者は先に「ソロン、詩と政治」、「テオグニス」、「アルカイオスとミュティレネ」なる論文を印行に付した[2]。本稿はそれらを承けてソロン、テオグニス、アルカイオス以外の詩人を新たな考究の対象として加える。それと上記三名の詩作品より得られた知見とを併せて、抒情詩類について綜合的考察を行いたい。前古典期の歴史についてそれらが全体として示教するところを示さんとするものである。もっとも、

そうした作業は相当に困難ではある。それは、一つにはもとより詩の伝存状況に由る。アルカイクの詩歌は断片的極まりなしとするのである。第二にそれらはあくまでも文学作品である。それらは事実そのままを叙さんとするものではない。従来なされる事があったように、事実と創作とを混同してはならない。詩作品より歴史的事実を抽出するには細心の配慮を要するのである。これらに由って観れば本稿において論じ得る事項は相当に限定されるであろう。かつ、分析の対象とはなし難い詩人も少なからぬ数に上るであろう。[3] 第三に対象が広大である。本来ならばかかる作業には一巻の書物を充当すべきであろう。しかし、簡単な鳥瞰図を提示する事にも意味はあろう。それによって世人の蒙を啓き、今後の展望を拓かんとするものである。もっとも、広大さ故に論述には不十分な点も生ずるであろう。博雅の垂教を仰ぐ次第である。[4]

註

① R. Pfeiffer, Gottheit und Individuum in der frühgriechischen Lyrik, *Ausgewählte Schriften*, München 1960, 42 (*Philologus* 84, 1929) ; A. R. Burn, *The Lyric Age of Greece*, London 1960.

② それぞれ『史林』七九巻四号、平成八年、『古代文化』四九巻六号、平成九年、『西洋史学』一九〇号、平成十年。

③ ステシコロスやイビュコスはこの類に属する。

④ なお、言を俟たぬところながら、各詩人に関して文学的思想史的側面は本篇においては捨象される。断片番号は以下に従う。

Kallinos, Tyrtaios, Mimnermos, Solon, Phokylides : Gentili-Prato, *Poetae Elegiaci*.
Archilochos, Semonides : West, *Iambi et Elegi Graeci*.
Alkman, Anakreon, Simonides : Page, *Poetae Melici Graeci*.
Sappho : Lobel-Page, *Poetarum Lesbiorum Fragmenta*.
Xenophanes : Diels-Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*.

一

政治、社会より稿を起すのであるが、本節ではそれらに関しソロン、テオグニス、アルカイオスの詩篇より得られた結果を要約しておく。先ずミュティレネであるが、六百年前後、そこに民会と評議会が存したのは明白である。後者の構成、権能については明瞭を欠くが、他方、民会は恒常的機関であり、多数の市民がそれに出席するを得た。かつ、それは必ずしも有力者の嚮導するところではなく、民衆は一定の政治的力量を備えていた。

テオグニスの頃、メガラの政体は寡頭政であったろう。それは財産本位の政体であって、民衆にとり政治的上昇の可能性は低くはなかったであろう。メガラにおいては古き頃に民主政が成立を見たと伝えられるが、宜なるかなの感がある。民衆は政治の客体とは称し得ないのである。

政治に関して最も多量の情報を提供するのはソロンである。彼は重荷降し（セイサクテイア）を実施したが、これが貧民に有利なのは明白である。彼の国制改革も民を利するものであった。ソロンによればポリスは自由人全体より構成され、その各人が国家に対して責任を負わねばならぬ。かくなる思想は民主主義的であるが、それは忽然としてソロンの脳裡に浮かんだものではない。それを着想せしめるが如き土壌が既にあったのである。従前より民衆は国制上一定の地歩を占めており、ソロンは広汎なる民衆に訴えかけたものと見られる。そのような前提条件がなければ果断なる改革も実地に移されなかったであろう。以上、三名の詩作品においては身分的秩序の下に呻吟する「平民」などの姿は看取されないところである。

ギリシアの詩文においてはagathoi, esthloi-kakoiという対照が現れる。かくなる表現は一方では「良き人、立派な人」――「悪しき者」という事で、それは倫理的用法と称して不都合はない。他方、それらの語は社会的意味を帯する事がある。agathoi, esthloiは上流を、kakoiは下層を表すわけだ。また、両様の用法が渾然一体となった場合も稀とはしない。ただ、抒情詩、エレゲイアの類にあっては社会的用例は存外少ないものがある。テオグニスをともかく別とすればソロンには若干現れるのみ。アルカイオスとピンダロスには少数例が算えられる

だけ。しかも、kakoiの用例はこれを欠く。他の詩人にあっては更に稀として支障はない。[1] この事の意味するところは何であろうか。kakoiを用いない者は民衆を軽侮しないのであろうか。或はアルキロコスなどこの点は如何であろうか。目下、判断を下し難いものがある。

三名の詩人であるが、ソロン自身は如上の社会層を大きくは区別しない。アルカイオスのesloi (esthloi) も曖昧である。旧きメガラに関して言えば、そこでは社会秩序が固定していたと説かれるのが一般的である。agathoi, esthloiとkakoi或はdeiloiとの間には厳然たる牆壁が存したというのである。然るに、テオグニスの詩を詳細な検討に付するに、そのような解釈は是認されるものではない。メガラにおいては古くより成上り者が存し、それが旧支配層に吸収同化され、やがてはagathoi, esthloiと呼ばれるようになる。元来の支配層にもその事を嫌忌する風は強くなく、富を蓄積した者には上層への門戸が開かれたのである。かく以って観ずるに、agathoi, esthloiとkakoiとの較差は本来的に僅少であった事になる。

そもそも、agathoi, esthloiとkakoiとの対比は古典期においてもなされる。五世紀に入ってよりはkaloi kagathoi, beltistoiなどの表現が用いられ、上下の差違が却って強調されるようになったのかもしれない。[2] 付言するに、遥か後世にあっても、生れ良き人eugeneisへの敬重は渝(かわ)る事がない。従って、前古典期のagathoi, esthloiのみを特別に閉鎖的身分と断ずるならば、それは異様である。

ソロン、テオグニス、アルカイオスに見られる社会とはいわば開かれた体系をなすのである。そこでは社会的、政治的上昇或は没落は珍しい事ではない。閉鎖的支配層や特権意識を探知するのも困難である。「貴族の支配装置」に至ってはその証跡を見出す事は不可能事に属する。

註

① Cf. Archil. F225 ; Phokyl. F3. 1. また、Anakr. F388. 5 (poneros)。この詩にて歌われたアルテモンは成上り者として著名である。後述、一八ページ。

② 芝川「ソロン、詩と政治」一三一―一三二ページ。同「テオグニス」一四―一五ページ。同「アルカイオスとミュティレネ」五三ページ。

二

アルクマンは七世紀のスパルタにて活躍した詩人である。[1] その F17 は歴史的考究の対象となる。この断片は食物をめぐるものであるが、エーレンベルク[2]によればここには社会的階層の区別が示される。社会における上流と下層との対抗関係を F20 より読取らんとする向きもある。[3] また、アルクマンには紫色の衣服や黄金製品など贅沢品が少なからず歌われる。[4] ここからスパルタにおける華美な生活や、ひいてはそれを享受する上流階級[5]の存在を推知する事は可能である。しかしながら、政治、社会の史料としてはアルクマンは明証に欠ける憾みがある。その点ではテュルタイオスに如かない。

テュルタイオスは第二次メッセニア戦争時の人。出自に関しては議論が多い。[6] 先ず、プルタルコスがリュクルゴス伝 (6. 5) において引用するところの詩 (F1[b]) であるが、その三―六行、

評議を始むは神にも敬まわる王たち。スパルタが愛しきポリス、それらが配慮す。また長老たちが、次いでは民衆も。真直のレートラーに応じつつ。

これはデルポイより齎らされた神託との事である。ディオドロスが伝えるもの[7] (F14) はこれとは少しく形を異にする。ただ、それは、F1[b], 3-6 をその中に含む。また、その九行には「民衆に勝利と力従うべく」なる語句が見出される。これら、プルタルコスとディオドロスの引用であるが、テクスト自体、両者の関係、歴史的解釈等に亘って単簡には処理し得ないものがある。[8]

一般に、テュルタイオス F1[b], 14 は大レートラーと関連づけられる。周知の如く、大レートラーをめぐる議論には喧々囂々たるものがある。ここではそれの末尾部分[9]であるが、テクストが損壊している。ただ、damos の語はその中に認められるべきであろう。また、kai kratos なる文言は確実に伝わる。されば、そこでは何らかの意味で民衆の権限が語られたのではないか。この事の傍証を供するのは如上のテュルタイオスである。それは大レートラーと余りに類似するからである。

プルタルコスは大レートラーの「追加条項」にも論及する。[10] これをめぐっても議論は錯綜する。テクスト自身、歴史的関連、またそれが

真に「追加」たるか否かなどが問われるのである。[11] ただ、そこで民衆と王、長老との勢力関係が論定されたのは確実である。プルタルコスによれば「追加条項」の目的は民衆の専横を防遏する事にあったのであるが、この点、彼に一定の理を認めてよいのではないか。そうした解釈を補強せんとして彼はテュルタイオスを引用したのであった。

かくして、テュルタイオス F1b, 14 は大レートラーと相俟って民衆の力を伝えるものとなる。それらの詩においては王――長老会――民会という構造が歌われるのであったが、これは古典期スパルタの政治構造と同一である。テュルタイオスに現れる民衆[12]を古典期のそれから質的に区別し難い事は否認すべくもないところである。

テュルタイオスの詩は軍国主義精神横溢し、その内容は多く凄絶ともいうべきものである。ここではその代表として F9 を取上げる。[13] そこでは俊足、膂力、美貌、富、権力、弁舌等凡ゆる価値が擯斥され、武勇のみが唯一至上として賞讃される。俊足以下[14]はホメロス的価値観とも呼ばれるもので、ギリシア人にとり一つの理想であった。それに対し、武勇こそはポリスと全国民にとりて共通の善なれ xynon d' esthlon touto polei te panti te demôi[15] というものである。ここにおいて国民の一体感が強調されるかに観ぜられる。

然るに、panti 以下は実はホメロスに現れる句である。[16] 語句は同一であるが、内実は如何であろうか。ここで想起すべきは戦術の変化である。もしもホメロスにおいては貴族の一騎打ちが主体であり、その後、大略七世紀に重装歩兵戦術が発達を遂げたとするならば、テュルタイオスはその発展途上に位置する事となる。[17] それに応じて、テュルタイオスにおいてはポリス道徳が進展を見たとされるかもしれない。[18]

さりながら、ラタツ[19]によるならば『イリアス』においても勝敗の帰趨を決するのは集団的戦闘である。これは重装歩兵戦術の先蹤とされる。そうすれば既に『イリアス』の軍隊においても共同意識が涵養され、それの中核をなす兵卒、即ちそれを構成する庶民の比重が大きかった事となる。ラタツ唱うところによればカリノス、テュルタイオスの時期における戦術は『イリアス』のそれと同様である。[20] そうすれば、思想的にも『イリアス』とカリノス、テュルタイオスに現れたそれとの間には逕庭なき事になる。[21]

しかしながら、テュルタイオスの場合、ポリス統合の意識はホメロスにおけるよりも強化されているのではなかろうか。F9 の後半であるが、そこでは戦死者の名誉が説かれる。それを哀悼するのは全ポリスである。彼の名声はポリスにおいて不滅なのである。イェーガー[22]をして説かしめるならば、ここにて名誉はポリスの永続なる観念と緊密に結合し、至高のポリス像が呈示される。市民に凡ゆる犠牲を要求する

ポリス[23]であるが、それは倫理的力を有する。ホメロスとは異なる所以との事である。

テュルタイオスの現存する詩は多くが兵士を叱咤激励するものである。第二次メッセニア戦争という危急存亡の時に当って、スパルタとしては全ポリスを挙げ、死力を尽して勝利に向け邁進しなければならない。そのためにはポリスへの献身、没入が要求される。かくして、運命共同体としてのポリスという意識がテュルタイオスにおいて高揚を見たのであろう。そこでは全兵士に配慮が加えられ[24]、共同の意識が肝要となる。テュルタイオスは勇武の者のみを「良き人」aner agathos として賞揚する。そこには個人の出生や地位、富強を問う姿勢はなく、それを平等主義的[25]と呼ぶのも可能ではある。当時のスパルタにはそうした思想を醸成し、またそれを受容する要素が存したのである[26]。

× × ×

エペソスのカリノスであるが、これは年代的にはテュルタイオスに稍々先行するのであろう。著名なのは断片一であるが、これはテュルタイオスと同工である[27]。ここでも人々はポリス全体のために戦い斃れるのである[28]。少なくとも、カリノスにとってはそれがあるべき姿なのである[29]。

註

① アルクマンは、本来、奴隷の身であったかもしれない。*Suda*, Alkman; Heraclid. Lemb. *Excerpt. Polit.* 9.
② V. Ehrenberg, Der Damos im archaischen Sparta, *Polis und Imperium*, Zürich 1965, 202-204 (*Hermes* 68, 1933).
③ F. Kiechle, *Lakonien und Sparta*, München 1963, 191, 215.
④ L. Thommen, *Lakedaimonion Politeia, Historia*, Einzelschriften, 103, Stuttgart 1996, 44.
⑤ この点は後述。一八ページ以下。
⑥ 或る種の伝承（Pausanias, Ⅳ. 15. 6 など）によればテュルタイオスはアテナイにおける跛足の教師であった。しかし、これは信憑性に問題がある。
⑦ Diod. Sic. Ⅶ. 12. 6.
⑧ この問題に関しては論攷を一点のみ挙げておく。P. Steinmetz, Das Erwachen des geschichtlichen Bewusstseins in der Polis, *Politeia und Res Publica* (hg. von Steinmetz) Wiesbaden 1969, 63-70.
⑨ Plut. *Lyk.* 6. 1.

⑩ *Ibid*. 6. 4.

⑪ 文献を若干掲げておく。H. T. Wade-Gery, The Spartan Rhetra in Plutarch, *Lycurgus* VI, *Essays in Greek History*, Oxford 1958, 37-85 (*CQ* 36, 1943-1944) ; K. Bringmann, Die grosse Rhetra und die Entstehung des spartanischen Kosmos, *Sparta* (hg. von Christ) Darmstadt 1986, 351-365 (*Historia* 24, 1975).

⑫ アリストテレス (*Pol*. 1306b36-1307a2) によればメッセニア戦役の際、スパルタには擾乱が生じた。窮迫した者が土地再分配を要求したというのである。その間の事情はテュルタイオスの『エウノミア』より知られるという。その当時、政治的主導権を掌握せんとする動きも民衆の間に生じたのであろう。なお、今日、テュルタイオスの F1[b], 14 は『エウノミア』の一部をなすと考えられる事が多い。

⑬ この作品はテュルタイオスの真作であろう。

⑭ これらは学説史において「貴族的価値観」などとされる事が多かった。本篇一八ページ。

⑮ F9. 15. ここにおける esthlon はもとより良き事の意。demos は国民全体に重点が置かれる。

⑯ *Il*. III. 50, XXIV. 706. テュルタイオスにはホメロス的定型句が多い。詩作の上では叙事詩の大いなる影響下にある。

⑰ この点についても議論は喧すしいものがあった。Cf. P. Cartledge, Hopliten und Helden : Spartas Beitrag zur Technik der antiken Kriegskunst, *Sparta*, 422-423 (Hoplites and Heroes : Sparta's Contribution to the Technique of Ancient Warfare, *JHS* 97, 1977).

⑱ W. Donlan, *The Aristocratic Ideal in Ancient Greece*, Lawrence, Kansas 1980, 40-41.

⑲ J. Latacz, *Kampfparänese, Kampfdarstellung und Kampfwirklichkeit in der Ilias, bei Kallions und Tyrtaios*, München 1977. この研究は重要である。

⑳ *Ibid*. 237.

㉑ *Ibid*. 156-158. ここではテュルタイオスは守旧的とされる。

㉒ W. Jaeger, Tyrtaios. Über die wahre Arete, *Die griechische Elegie* (hg. von G. Pfohl), Darmstadt 1972, 123-125 (*SB. d Preuss. Ak. d. Wiss.* 1932). cf. R. Harder, Die geschichtliche Stellung des Tyrtaios, *Kleine Schriften*, München 1960, 163 (1945).

㉓ これは、もとより、F9 以外の詩においても同じい。

㉔ F8. 35 では軽装兵が言及される。

㉕ Cf. Pausanias, IV. 15. 6. Tyrt. F8. 1 では兵士全員がヘラクレスの血統に連なるとされる。cf. F1[a]. 13-15.

㉖ ポリス一体性の意識強きソロンは民主主義的思想を抱懐したのであったが、テュルタイオスにもそれと一脈通ずる要素は認められる。ただ、テュルタイオスの詩は多くが鼓舞激励を意図するものであるから、そこでは特定の価値のみが殊更に宣揚される傾きを生じる(本論文五節註㉓)。テュルタイオス自身の立場としてはスパルタの王を讃美するものであったろう。cf. A. Andrewes, Eunomia, *CQ* 32, 1938, 96-97 ; Steinmetz, *op. cit.* 70.

㉗ この詩は宴会に列席する人士に宛てられた (E. L. Bowie, Early Greek Elegy, Symposium and Public Festival, *JHS* 106, 1986, 16) ものでは

ない。W. J. Verdenius, Callinus FR. 1, *Mnemosyne* 25, 1972, 2.

㉘ カリノスとホメロスとの差違を強調するのはR. Leimbach, Kallinos und die Polis, *Hermes* 106, 1978, 265-279.

㉙ F1. 17には oligos kai megas とある。ドンラン（*The Aristocratic Ideal*, 50）曰く、これは社会的較差を示す。D. E. Gerber, *Euterpe*, Amsterdam 1970, 46.

三

本稿の観点よりして何程か政治に関して論及し得る詩人は、既に叙した者の他には、クセノパネス、ピンダロス、アルキロコス程度であろうか。先ずクセノパネス。断片三、

厭うべき僭主政より自由なりし間、リュディア人輩より無益なる贅沢 habrosynas を学びて、紫色の上衣を身に纏いては、総勢千人を下らぬ数にてアゴラ eis agoren へ赴きしものなりし。傲然たる姿にて、見事なる頭髪を誇りつつ、妙なる香料の匂にて身を浸して。

これはクセノパネスがコロポン人の驕奢を嘲罵した作である。

クセノパネスはコロポン出身であるが、この詩が対象とする時期は詳らかとしない。僭主政についても不明と言うより他はない。三行目の agore であるが、これは何を意味するのか。一説[①]によれば、これは集会を示す。そこで主権者たちが国事を議したというわけである。他方、バウラ[②]の主張するところでは、それは広場である。この詩が物語るのは有産者たちが贅を凝らして広場を訪れた事のみというのである。かくなる両説、優劣の判定はしかく容易ではない。ただ、一千という多人数が、豪華なる扮装の下、何故に恒常的に広場を闊歩するのか、この点がバウラ説では必ずしも判然とはしない。また、二行の「僭主政」をも顧慮すればバウラに左袒するのは多少とも困難ではないか。

主権者を千名など一定の数に限定する事はギリシアでは屢々行われるところであった。クセノパネス叙すところのコロポンでは一千人の富裕者による支配が布かれたのであろう。[③] F3ではまさに富が強調されている。財産級が存してそれに到達した者が主権者集団に入る資格を得たのであろうか。これは寡頭政であるが、それは時代の如何を問わず生ずる。富有の者は常に存するのであるから。

バウラの説では、クセノパネスは貴族社会の中で世を過し、そこにおいて伝統的立場より詩作した。[4] F1にて歌われた饗宴などはまさにその証と看做される。しかし、F1において吾人の目を惹くのはクセノパネスの新奇なる思考[5]である。出生は別として、彼は長きに亘る亡命生活の中で辛酸を嘗める事も少なからずとしたであろう。[6] 彼はむしろ貧窮を味わったのではないか。それでは、バウラとは逆に考うべきであろうか。「市民的」立場よりクセノパネスは上層の倫理を論難したのであろうか。[7] しかしながら、F3にしても寡頭政の打倒を叫ぶ体のものではない。F2ではオリンピック競技が批判されるが、運動愛好はギリシア人全般に共通するもので、別段、上流階級に限定されるものではない。[8] これらにしてもF1にしても「市民」としての立脚点からの自己主張というよりも、哲学的思索の結果と見るべきではないか。クセノパネスは独創的思想家として常識を超越する地点に到達したのではなかろうか。彼の現存断片中、政治、社会に多少とも関わるものは如上の三篇以外には少数を算えるのみ。この事は彼における関心の所在を物語るものである。

× × ×

ピンダロスであるが、これは転換期に生を享け、保守偏狭にして勃興する人民には一顧だにも与えず、専ら没落する貴族層のみを愛惜してそれに対して挽歌を奏でた。大略、このように評される事もある。[9] ピンダロスは年代的にむしろ古典的に属すし、別に原稿を準備している事もあるので、ここでは一言するにとどめる。運動競技の優勝者はピンダロスによって称えられたのであるが、競技者は一般に資産を要する。かつ、ピンダロスにも高額の支払を必要とする。彼としては報酬を受ければ需めに応じて祝捷歌を製し、神話的祖先を適宜称讃したのではなかろうか。[10] それは最高度に浄化された貴族の理想像[11]などというものであろうか。それをしも尊き血への讃仰などと表現するならば、その事は必ずしも適切ではない。ピンダロスの顧客は隆昌を誇る有産者である。血統のみを誇る斜陽の一族など彼は歯牙にもかけなかったであろう。かくて、ピンダロスより閉鎖的特権集団を措定する事には些少ならぬ疑問が胚胎する次第である。[12]

× × ×

アルキロコスはパロスの人。年代は七世紀前半から中葉にかけてであろう。彼の父テレシクレスはタソスへの植民団を率いたとの伝承がある。[13] それならば、これは有力者だったのであろう。[14] ただ、アルキロコスは奴隷女との子と伝えられる。[15] 例えば高津春繁[16]はこの間の事情を重要視する。アルキロコスは私生児たるがために恵まれぬ運命にあり、傭兵となる事を強いられた。彼の激しい皮肉な性格もそのような出

生の然らしめるところかもしれない、と。しかしながら、当時のパロスにおける庶子の地位について詳細は不明である。そもそも、彼が庶子であったか否かに疑問を挾む向きもある。[17]

高津もそう考えるところであるが、学説史においてアルキロコスは傭兵とされる事があった。[18] 彼は貧窮に陥ったとも伝えられる。[19] タソスに移ったのもそのためともいう。[20] 更に、各地を転じて有為転変を経験した可能性もある。彼は無頼漢の如く評される事もあった。[21] 他面、晩年ナクソスとの戦闘に参加した事よりも明瞭なように、彼にはポリス市民としての要素も看過し難い。[22]

このように彼の生涯を再構成するのはなかなかの難事なのである。諸々の伝承、学説が交錯するのである。ところで、彼の詩にはペリクレスなど友人の名が間々現れる。その中、最も親密と思料されるのがグラウコスである。この人物に関しては一九五四年、タソスにおいて記念碑が発見された。[23] グラウコスは重要人物であり、今日、アルキロコス F114 の将軍に比定される。[24] そうすると、これはパロスやタソスの社会につき一つの参考資料を提供するものではある。グラウコスの血統は如何であろうか。将軍職への就任は名門出身者のみの能くするところであったのか。或はそうとは限らないのか。アルキロコスが落魄していたとするならば、それと将軍との親交は異例には属さなかったのか等々、多々問題が生じる。ただ、これらを解明するためには、やはり材料過少と言わずばなるまい。

リュカンベスの娘ネオブーレーとの婚約破棄事件も著名である。この件によりアルキロコスは忿怒を発し、リュカンベスとその娘たちに罵辱を加えたという。リュカンベスは実在の人物。[25] おそらくは名門であろう。それでは婚約破棄の理由は奈辺に索めらるべきか。両家の家格の相違であろうか。或はアルキロコス自身の貧窮や行状、庶子たるの地位が問題視されたのであろうか。これらの点につき推測を逞しくするのは可能ではあろう。当時の社会や心性を推察する上で興味津々たるものもそこにはあるかもしれない。然るに、この破約事件が史実なのか否か、その事自体が疑念に晒されているところではある。[26]

アルキロコスが故国パロスの政治に携った形跡はある。[27] 財を喪ってタソス移住を余儀なくされたのもそのためとも伝えられるのであった。[28] 彼が民主派的立場を取ったなどと説かれる事もある。[29] しかし、畢竟、それは揣摩臆測の域を出るものではない。F115 ではレオピロス Leophilos なる人物が権力者として歌われている。その名（「民衆の友」の意。これは渾名であろう。）より推すと、これは民衆煽動家であったのかもしれない。当時の社会では煽動家が蠢動し、民衆の意を迎えた者が僭主の地位に成上ったのかもしれない。そうすれば民衆には自立的

政治勢力としての側面が存した事になる。ただ、F115もまた前後の脈絡は分明でない。[30]

以上を以って観ずるに、アルキロコスの生涯、詩作より当時の政治、社会につき断案を下す事には躊躇を覚えざるを得ない。家柄の持つ意味、社会的流動性、政治の様態等につき情報は余りに断片的かつ曖昧である。吾人の希求するのは確実な知識なのである。

アルキロコスにはホメロス的英雄主義的価値観よりの意識的背反が認められるとは屢々指摘されるところであった。[31] その例証としてF5やF114など用いられる事が多い。[32] 自分は楯は抛擲したがそのような事は意に介さぬ、自己の命は救出したというのが前者の内容である。これは英雄的名誉観に抵触すると言われる。F114においては大柄で洒落者の将軍は自分としては好まない。それよりも短軀で足が彎曲していても内実が伴うならばその男の方が良し、とされる。ここでは、ホメロスにおけるが如く外面の美に価値が置かれないというわけである。これらの詩には古き羈絆を脱したアルキロコス独自の価値意識が表出されているなどとの説がなされるのである。

この問題に関しても議論は尽きないのであるが、[33] 一つ留意すべき点がある。詩作品はあくまでも創作なのである。詩中の一人称は必ずしもアルキロコス自身を指示するとは限らない。作品において詩人の経験や意識が忠実に描出されていると直ちに断ずるならば、それは早計の譏を免れ難い事となる。[34] また、詩人が虚構を構えるに際しては特定の効果が期されるであろう。例えば、F114は友人グラウコスへの揶揄を意図しただけの作かもしれないのである。[35][36]

ただ、アルキロコスの作品に関し確実に立言し得る事はある。彼には英雄的、エリート主義的心情を謳い上げる詩は見出し難い。これは事実である。それに反する作品が多いのである。アルキロコスの詩を綜覧するに際しては、醒めて世間の常識を愚弄する、体裁を構わぬ、放埒、本能的などの形容が浮かぶであろうか。[37] そこには意味を認めざるを得ない。如何なる意図の下に詩が製されたは別として。彼の作には華美、遊楽の趣もない。殊に感情の奔出や、クリティアスの指摘するところであったが、[38] アルキロコスが出生など自身の恥部を自ら曝露したとするならば、それらは精神の貴族にはなす能わぬところである。名誉の観念に背馳するのである。彼の詩は猥雑であり、俗語をも交え、全般的色調として庶民的な事に疑問はない。[39]

註

① H. Fränkel, Xenophanesstudien, *Hermes* 60, 1925, 179-180.

② C. M. Bowra, Xenophanes, Fragment 3, *CQ* 35, 1941, 121-123. cf. E. Heitsch, *Xenophanes : Die Fragmente*, München und Zürich 1983, 114.

③ コロポンで奢侈放逸に耽ったのは相当の多数に上るわけだ。cf. Ar. *Pol.* 1290b14-17. なお、上層の生活様式をめぐっては五節参照。

④ Bowra, Xenophanes, Fragment 1, *CP* 33, 1938, 353-367 など。

⑤ K. Ziegler, Xenophanes von Kolophon, ein Revolutionär des Geistes, *Gymnasium* 72, 1965, 291-294.

⑥ *Ibid.* 290-291.

⑦ E. Stein-Hölkeskamp, *Adelskultur und Polisgesellschaft*, Stuttgart 1989, 125-126.

⑧ 後述、一八ページ。

⑨ Cf. Jaeger, *Paideia* I, Berlin 1936, 249-251.

⑩ 神話的系譜を仮作するなど造作もない事であろう。この点においても、文学作品における虚構と現実との関係に思いを致すべきであろう。なお、ピンダロスは、通常、現実の祖先ではなく神話的なそれを讃美するが、この点注意を払うべきであろう。

⑪ Jaeger, *Paideia* I, 271.

⑫ kakoi については前述。なお、本稿一九ページをも参照されたい。

⑬ Euseb. *Praep. Ev.* VI. 7. 8. cf. A. J. Graham, The Foundation of Thasos, *BSA* 73, 1978, 75-86.

⑭ Mnes. Inscr. E1, col. II.

⑮ Kritias, F44 (D.-K.). (Aelian. *Var. Hist.* X. 13).

⑯ 『古代ギリシア文学史』、岩波書店、昭和二七年、五三―五四ページ。

⑰ Cf. A. P. Burnett, *Three Archaic Poets*, London 1983, 27-28.

⑱ しかしこれにも問題がある。F. Lasserre-A. Bonnard, *Archiloque, Fragments*, Paris 1958, XXI-XXII.

⑲ Kritias, F44. Pindar. *Pyth.* 2. 53-58 もその事を含意する可能性はある。cf. Schol. ad Pindar. *Pyth.* 2. 99-101. 及び H. D. Rankin, *Archilochus of Paros*, Park Ridge, New Jersey 1977, 13 ; Euseb. *Praep. Ev.* V. 31. 1.

⑳ Kritias, F44 ; Euseb. *Praep. Ev.* V. 31. 1.

㉑ 藤縄謙三「アルキロコスについて」、『歴史学の起源』、力富書房、昭和五八年、二〇二ページ（初出は『史林』五四巻一号、昭和四六年）参照。

㉒ Cf. N. M. Kontoleon, Archilochos und Paros, *Entretiens sur l'antiquité classique* X, *Archiloque*, Vandœuvre-Genève 1964, 39, 78. 藤縄「アルキロコスについて」二三〇―二三二ページ。

㉓ J. Pouilloux, Glaucos, fils de Leptine, Parien, *BCH* 79, 1955, 75-86. なお、石碑中「ブレンテスが子息たち」は不明。

㉔ F117, 96.

㉕ Mnes. Inscr. E1, col. II.

㉖ E. g. Burnett, *op. cit*. 19-23.

㉗ Athenaios, 627c.

㉘ Euseb. *Praep. Ev*. V. 31. 1.

㉙ Lasserre-Bonnard, *Archiloque, Fragments*, LI, LVI; Rankin, *op. cit*. 83. ボナールは以下の如く記す。"… Archiloque peut être considéré comme le premier porte-parole des efforts qui aboutiront à la chute des vieilles aristocraties, …." しかし、F109などに多くを語らしめんとするのは問題である。

㉚ Cf. F14, Pap. Ox. 2310.

㉛ E. g. H. Gundert, Archilochos und Solon, *Die griechische Elegie*, 79-90 (Das neue Bild der Antike 1, 1942).

㉜ Cf. B. Snell, *Die Entdeckung des Geistes*[3], Hamburg 1955. 『精神の発見』新井靖一訳、創文社、昭和四九年、一一三―一一四ページ。

㉝ H. Lloyd-Jones, *The Justice of Zeus*, Berkeley 1971. 『ゼウスの正義』真方忠道、陽子訳、岩波書店、昭和五八年、六二―六七ページ。

㉞ Cf. K. J. Dover, The Poetry of Archilochus, *Entretiens sur l'antiquité classique, Archiloque*, 199-212; Burnett, *op. cit*. 31-32.

㉟ 本論文一一ページ。

㊱ ドンラン (The Tradition of Anti-Aristocratic Thought in Early Greek Poetry, *Historia* 22, 1973, 146-147) はアルキロコスを「反貴族的思考」に帰属せしめるが、今少し慎重な手続が必要であろう。

㊲ この関連では以下の断片などが直ちに想出されるであろう。F11, 14, 15, 19, 21, 43, 101, 102, 116, 119, 126, 133, 172, 252, 331.

㊳ Kritias, F44.

㊴ アルキロコスの詩には広汎な聴衆を想定すべきであろう。cf. Lasserre-Bonnard, *Archiloque, Fragments*, CIX. 動物寓話も民衆的であろう。彼の詩は祭礼において歌われる事もあったろう。cf. F251. バーネット (*op. cit.* 59-60) によれば嘲弄詩とは社会全体を対象とする。社会を健全に保つために必要なのである。アルキロコスの場合も、それは傷付けられた個人の忿懣に発するなどというものではないとの事である。
ボウイ (*op. cit*. 13-35) 唱えるところでは、エレゲイアはその大部分が饗宴にて誦された。しかしこの主張は過度というものであろう。本稿七ページ、二節註㉗。更に、芝川「ソロン、詩と政治」一一七―一一八ページ、「アルカイオスとミュティレネ」四三ページ参照。

四

次はポキュリデスやイアンボス作家のセモニデス、ヒッポナクス。ポキュリデスは六世紀のミレトスにおいて人となったが、これは中庸や勤労を尊ぶ。[1] 生計が足りて後にアレテーを索めよという詩[2]も少々衝撃的であるが、次の作[3]も或る意味で挑戦的ですらある。

これもまたポキュリデスが言なり。[4] 良き生れに何の利かあらん、言葉にせよ評議にせよ典雅伴わぬ者にとりて。

良き生れが全く尊重されないのであろうか。これは下層の立場より上流階級を誹毀せんとしたものであろうか。もっとも、詩の後半を顧慮すればそれは生れ良さ自体を排撃するものではないであろう。それにしても、ギリシアでは遥か後世に至るまで名門たる事には、通常、敬意が払われるのであった。[5] その中でポキュリデスF3は異例に属すと言わずばなるまい。

セモニデスはおそらく七世紀の人。サモス生れであるがアモルゴスへの植民団を統率したという。その詩は題材や内容など日常的である。同じくイアンボス作家のヒッポナクスはエペソス出身で、年代は六世紀後半であろうか。彼の詩は貧困、不潔、淫猥に満ちている。そうした事を筆に上せるを愧じもしないとは卑陋の極致とも評すべきか。もっとも、ウェスト[6]によればこの事はイアンボスというジャンルに起因する。この点はアルキロコスとも通じるのであるが、ヒッポナクスは卑賤な道化役を演技するのみとの事である。しかし、それにしてもそれは大衆の卑俗な趣味に迎合するものであり、貴族精神の対極に位置すると言わねばなるまい。

これら三名の詩人であるが、ヒッポナクスのみならず、セモニデス、ポキュリデスにも資質、作風においてアルキロコスと共通する要素が認められるのではないか。これらを個々別々でなく、相互に連係せしめて講究すれば如何であろうか。この点、参考に供すべきはドンラン学説[7]である。学説史における常識としてはギリシアの前古典期はもとより貴族の時代であり、思想的にも貴族的理想が他を圧すると説かれてきた。然るに、ドンランによるならばそれに反する価値意識も無視し難く、むしろそれはアルカイク期にあって重要な潮流を形成した。ドンランはその種の思潮を反貴族的思考と命名し、[8] その存在を抒情詩類の中に確証せんとしたのである。

このようなドンラン学説は卓見と評して支障はない。確かに前古典期において「反貴族的思考」はなかなかに強力である。本節にて触れ

たポキュリデス、セモニデス、ヒッポナクスと、前節で取上げたアルキロコスはその系統に属する。ソロンもまたそれらと類を近くする。彼が富裕者に反感を抱いたのは明白である。彼は驕慢(ヒュブリス)、貪欲、不正なる富を排斥し、中庸を標榜した。生業に勤しむ庶民には好意的であったと見られる。[9]

この他に、テュルタイオスやカリノス[10]も所謂「反貴族的思考」――それはむしろ「市民的規範[11]」若しくは「市民倫理」と称すべきであろうか――には親昵し易いのであった。[12]ここに挙げた詩人は数多に上る故、当然の事であるが、その内実は多彩である。農民的、土俗的なものもあれば、ポリスに密着する者も少なしとはしない。多くは真摯で現実から遊離せず、贅沢を排す。いわば小市民的生活に好意的な者、気質としてそのような特徴を身に帯びる詩人等、諸種の型が見受けられる。[13]しかし、これらは全体としては一大潮流として「エリート主義的伝統[14]」に対峙するとも想定されるのである。

この種の潮流は叙事詩のヘシオドスを大宗として古典期に至るまで連綿として持続する。それは何物にも臆さず堂々たる自己主張を行う。有力者に対する畏怖、屈従の類は看取されない。既にしてヘシオドスには意気軒昂たるものがあった。従って、この間、時代による消長を強調するならば、[15]それは適切を欠くのではないか。漸く呱々の声をあげた「市民道徳」が上層よりの圧迫にも拘らず時代を逐うにつれて頭を抬げた。古典期に入って遂にそれは凡ゆる桎梏を脱して開花し、他の思潮を凌駕するに至った、というものではないわけだ。[16]

註

① F12, 7. アマルテイアの角はアナクレオン F361 にも出る。そこではポキュリデスと視点が共有される事になる。
② F9. cf. Platon, *Politeia*, 407A.
③ F3.
④ Kai tode Phokylideo. ポキュリデスの現存断片は多くこの句で始まる。その事は彼の作品たる事を明示せんとする意図に発するものであろう。彼の詩は内容としては格言的なものが多い。
⑤ 本篇四〈ページ。
⑥ M. West, *Studies in Greek Elegy and Iambus*, Berlin, New York 1974, 28-30.
⑦ Donlan, Tradition of Anti-Aristocratic Thought, 145-154.

⑧ モリス（I. Morris, The Strong Principle of Equality and the Archaic Origins of Greek Democracy, *Demokratia* (ed. by J. Ober and C. Hedrick), Princeton 1996, 27-40）はこの傾向をmiddling traditionと呼ぶ。これと拮抗する思潮はelitist traditionとされる。

⑨ 芝川「ソロン、詩と政治」一一九―一二三ページ他。

⑩ 本篇七ページ。

⑪ Stein-Hölkeskamp, *op. cit.* 123.

⑫ クセノパネスをめぐっては上述。一〇ページ。

⑬ これら詩人の出身は概ね定かとはしない。その点には時に触れるところがあった。ソロンは家柄に関しては名門であるが財産の上では中流と伝えられるのであった（Plut. *Solon*, 1. 1; *Ath. Pol.* 5. 3; Ar. *Pol.* 1296a19-20）。詩人の出自も多様なのであろうか。ここで叙事詩人ヘシオドスについて一言しておくが、彼は伝統的には農民と考えられてきた。ヘシオドスは『仕事と日々』において農民としての自己主張をなすというのである。然るに、『仕事』に叙された姿を彼の実像と解するのは素朴に過ぎよう。もっとも、作品の傾向としては中流農民の立場を基盤とする。ただし、ここはヘシオドス論を展開する場ではない。

⑭ 本節註⑧。

⑮ Cf. Stein-Hölkeskamp, *op. cit.* 127-130. 詩人の年代は大要を記しておいた。

⑯ なお、五節註㊴参照。

五

サッポー[①]やアナクレオン[②]或はミムネルモス[③]であるが、これらは本稿の観点より論ずるのは容易でないかとの感もある。これらの詩人にあっては政治や社会への関心は稀薄と見られるかもしれないのである。しかし、それでも利用し得るものはある。これらの詩人は前節において扱ったとは別の系譜に属しめられるものであろう。それは通常の呼称では「貴族的思考」であるが、ここでは「エリート主義的伝統」と呼ぶ事にする。この系統はホメロスの叙事詩を淵源として、アルカイオスやテオグニス、ピンダロスもそれに算えられるというものであろう。[④]

それではこれらに共通するエリート主義を構成する要素とは何か。それは一つには富である。これらの詩人は濃淡の差はあれ、多く優雅

であり、豪奢な生活を歌う。酒杯を友とし、日夜逸楽に耽るとの感も時には生ずる。これらは上流階級に生を享けるか、或はその中で世を過したのであろう。[5]

優美に関して名高きはサッポーである。彼女の詩には黄金製品や紫色の衣服が頻出する。[6] habros（優雅な、贅沢な）とその関連語も多く、「われ、みやび habrosyne を愛す」なる章句も見られる。[7] サッポーやアナクレオンは華美な生を送ったのであり、[8] それは上流の生活様式として目に著き面があったろう。そういった生活がクセノパネス[9]やセモニデス[10]の反発を買う所以でもあった。

かくなる生の様式であるが、これは一部の者だけになし得るところであったのか。抒情詩類のみに即して言えば、この面において著名なのはアナクレオンのアルテモンである。[11] 悪漢にして赤貧洗うが如きアルテモン、今では黄金の耳輪を着け象牙のパラソルを携える、と歌われる。アナクレオンがここで何を諷さんとしたかは必ずしも明確ではないが、[12] アルテモンの如き人物が社会的上昇を遂げて奢侈を追求し得た事は事実となすべきである。

成上り者の存在はソロン、アルカイオス、殊にテオグニスより知られるところであった。当然ながら、それらの者は生活様式に関しても上流のそれを模したであろう。それらは時日を経れば凡ゆる意味で名門に成り了せたのである。そもそも、ソロン自身、或る意味では成上り者かもしれない。彼が貿易によって財をなしたという伝承[13]が事実ならばであるが。

ソロンは F18 では金銀や土地、馬など大きな財産を貶しめ、程々の生活を讃美している。[14] ただ、彼には生を満喫した側面がある。ソロンは酒色、就中、少年愛[15]を享受し、また猟犬所有者を賞讃するかの如くである。[16] 狩猟は富裕者のなすところであるから、この点では「市民派」ソロンとエリート主義との差違は大とはしなかったのであろうか。もっとも、F17 も前後の文脈は例の通り不明ではある。[17]

富以外にエリート主義の標徴となるものは何か。抒情詩、エレゲイアの類からは、この点、二節に引いたテュルタイオス F9 が便宜を提供する。そこで斥けられていた価値とは運動能力、美貌、致富、権力、弁舌等であった。これらは武勇やポリスの枠を越えた行動と共に、今日の学説では貴族的徳目とされる。

ここでは運動と美貌に関しては一言のみを費しておく。競技者讃美において最も著名なのはもとよりピンダロスである。彼の詩からも知られるところであるが、運動はギリシア人一般の深く関心を寄せるところであった。[18] クセノパネスは運動を激しく非難しているが、[19] これも

その事を証するものである。[20] 競技愛好はエリート層に局限されるものではない。[21]

男子の美貌であるが、これは少年愛の前提条件である。アナクレオンやテオグニスは少年を鍾愛する事にかけては人後に落ちないものがある。ミムネルモス、アルカイオス、ピンダロスはそれらに準ずるものである。他面、女子同性愛を実践したサッポーの名声は弥増に高い。然るに、同性愛を称えるのはエリート派の詩人に限定されるものではない。ソロンも少年愛を追求したのであった[22]し、テュルタイオスもそれに近いものがある。[23] 同性愛はギリシア文化全般に通ずる一大特徴なのである。

それではポリスに対する姿勢は如何であろうか。サッポーやアナクレオンは、この点、昭明でない。アルカイオス[24]であるが、彼はポリスの公共的性格を意識している。彼が僭主政を排するのも一つにはそれあるがためである。アルカイオスとその党与はポリスの中に統合されているのであって、彼はポリス全体を考量せずに自派の利害のみを追求するものではない。彼にあっては戦士共同体としてのポリスという理念も見出されるのである。[25] ポリス意識はミムネルモスにあっても微弱とはしない。[26] してみると、アルカイオスやミムネルモスはソロンやポキュリデス、[27] テュルタイオスなどより隔たる事遠からぬ事になる。

テオグニスは、通例、アルカイオスと共に貴族主義の権化と目される。然るに、テオグニス集を占めるのは多くは平凡な処世訓である。そこでは驕慢（ヒュブリス）、飽満が排され中庸が尊ばれる。[28] この点はピンダロス[29]と共通する。また、アルカイオス[30]とミムネルモス[31]にもそれを分有する一面はある。狷介なるテオグニスは民衆を侮蔑するが、他面、出生に絶対的価値を置くものではない。[32] アルカイオスも強烈なる特権意識はこれを欠く。彼は民衆に対しても配慮を加えるのであった。[33] サッポーやアナクレオンの断片にも民衆を軽侮するが如き言辞[34]は容易には見出し得ない。そうすればこれらの詩人は際立ってエリート主義的でないのではないか。

アルカイオスやテオグニスには「農民詩人」ヘシオドスの影響が認められる。ホメロスは今日の学説においては、通常、エリート的と目されるが、[35] それは広く衆庶の愛好するところであった。また、それは傾向の如何を問わず後続の詩人に絶大なる影響を及ぼす。アルキロコスやテュルタイオスなどもホメロス的語法の中で創作を行ったのである。また、アルカイオスやサッポー、テオグニス、アナクレオン、ピンダロスは後世、エリート層だけでなく広く一般に愛好されたものと見られる。[36]

これらに由って観ればエリート派の詩人とは他から画然と区別されないのではないか。それは必ずしも明確な形姿を取るものではない。

「エリート派」、「市民派」とは雖も、それぞれその内に種々の偏差を帯び、また相互に融合する面も少なくはない。詩人を二つの傾向に分つのは作業仮説としては有効であるが、それを厳格に適用すべきものではあるまい。

アルカイクの詩人を通観するに、「エリート派」の勢力に時代による消長は認められようか。当初優位にあったエリート主義的思潮が時を逐うにつれて頽勢に転じたとか、或はその過程の中で自らを変質せしめていったなどと説かれる事はある。[37] しかしそのような趨勢は抒情詩類にあっては容易には感知されないところである。[38] 前節末尾において「市民派」につき記したと同様、ここでも一直線的発展論を適用する事には疑念を呈せざるを得ないのである。[39]

註

① アルカイオスと同世代で、同じくミュティレネの人。
② 創作の中心期は六世紀後半に置かれる。
③ 活躍したのは七世紀後半か。出身はコロポンではなくスミュルナか。
④ ギリシアの詩人を二つの系列に区分した場合、シモニデスの位置を何れに設定するかは容易ならぬところと考えられるかもしれない。シモニデスにつきここではF542に一言触れるにとどめる。この詩はバウラ（*Greek Lyric Poetry*², Oxford 1961, 326-336）が説くように「貴族倫理」よりの転換を意味するものではない。それはピッタコスに見られる素朴な倫理が深化した事を示すだけのものである。
⑤ ヴィラモーヴィッツ（U. von Wilamowitz-Moellendorff, *Sappho und Simonides*, Zürich 1985(1913), 280）によればミムネルモスは微賤の身である。cf. A. Allen, *The Fragments of Mimnermus*, Stuttgart 1993, 16-17.
⑥ L. Kurke, The Politics of habrosyne in Archaic Greece, *Classical Antiquity* 11, 1992, 93. なお、アルクマンに関しては五ページ。
⑦ F58. 25. cf. Athenaios, 687a-b.
⑧ サッポーにはこれに反する詩もある。F148. cf. F98(a).
⑨ 本篇九ページ。cf. Asios, F13(Kinkel).
⑩ Semonides, F7. 57-70.
⑪ F372, 388.
⑫ Cf. C. Brown, From Rags to Riches: Anacreon's Artemon, *Phoenix* 37, 1983, 1-15.
⑬ Plut. *Solon*, 2.
⑭ 四行の habra pathein については I. M. Linforth, *Solon the Athenian*, Berkeley 1919, 212.

⑮ F16, 24. F18 五行の「少年」は性愛の対象としてのそれであろうか。F17はその点如何であろうか。

⑯ F17. 2.

⑰ 詩からは離れるが、ソロンは立法家として奢侈を抑制したと伝えられる（Plut. *Solon*, 21. 4-5; Athenaios, 687a）。この伝承に信が置かれるならば、アテナイの富裕者層は自己を貫徹する事が出来なかった事になる。富の誇示がそれだけ一般の間で顰蹙を買ったのであろうか。

⑱ Bowra, Xenophanes and the Olympic Games, *AJP* 59, 1938, 264-268.

⑲ F2.

⑳ 本篇一〇ページ。テュルタイオスF9もこの点は同様である。

㉑ 逆に、運動批判はクセノパネスの他にソロン（Diod. Sic. IX. 2. 5; Diog. Laert. I. 55）、ピュタゴラス（Porph. Vit. Pyth. 15）、エウリピデス（F282, Nauck）など傾向、性癖をそれぞれ異にする人々が行っている。これらは「市民」的立場よりの論難といったものではないわけだ。

㉒ 前述。一八ページ。

ソロンは奴隷に対し少年愛を禁止する法を発布したという（Plut. *Solon*, 1. 3）。少年愛の如き立派な事に自由人たらざる者は参画すべからずというわけである。この伝承は真偽の如何を問わず象徴的である。ギリシアのポリスにおいて重要なのは自由民と奴隷との区別であって、市民団内部におけるそれではないのである。もっとも、この点、結論を先取した事になるが。

㉓ テュルタイオスもF9. 5におけるとは異なり、F6. 9, F7. 28-30では美貌を評価している。F9には武勇を過度に宣揚せんとする傾きがある。本論文二節註㉖参照。

㉔ 芝川「アルカイオスとミュティレネ」四六―四七ページ。

㉕ こういった要素はテュルタイオスやカリノスの詩作品においては顕然たるものがあった。なお、戦士共同体にあっては、当然至極であるが、武勇が重要である。その点は時代、階層の別を問わない。

㉖ F21とF22よりミムネルモスが「スミュルネイス」と題するエレゲイアを執筆した事は知られる。他にF3とF23。ミムネルモスにとってリュディア軍の攻撃より祖国を防衛する事は喫緊事だったのである。

㉗ この関連で著名なのはF4である。そこでは小さなポリスに住む者の矜持が示されている。

㉘ 芝川「テオグニス」七ページ。

㉙ *Pyth.* 11. 52-53. その他。

㉚ 芝川「アルカイオスとミュティレネ」四七ページ。

㉛ F3. 4.

㉜ 芝川「テオグニス」六―七ページ。

㉝ 芝川「アルカイオスとミュティレネ」四二―五三ページ。

㉞ ミムネルモスF12はそのようなものではない。cf. Lloyd-Jones, *op. cit.* 前掲邦訳書七〇ページ。ピンダロスの民衆観をめぐってはcf. Donlan,

Aristocratic Ideal, 107-108.

㉟ 実際には必ずしもそうでない面はあるが。

㊱ 例えばアリストパネスにおけるそれらの詩人をめぐってはCh. Kugelmeier, *Reflexe früher und zeitgenössischer Lyrik in der alten attischen Komödie*, Stuttgart, Leipzig, 1996.

㊲ Donlan, *Aristocratic Ideal*, 74-75.

㊳ 芝川「テオグニス」七ページ参照。

㊴ 古典期にもエリート主義は持続する。ピンダロスも主として古典期に活動したのであった。この他、抒情詩人ではないがソポクレスとプラトンの名を挙げておく。この両名は精神の貴族以外の何物でもない。また、至極当然であるが、豪華絢爛たる生活も古典期においても行われる。そうすると倫理思想、生活様式という側面において、アルカイクとクラシックの間に厳然たる差異を設定するのがどの程度可能となるのであろうか。もっとも、言を俟たぬところであるが、この事は独立の論述を必要とする重要な問題である。

結

以上、材料豊富とは言えぬながら、抒情詩類を考究に付した。筆者が従前、ソロン、テオグニス、アルカイオス論において示した結果がここにおいて裏書されたと考えられる。ここにおいても、やはり、前古典期ギリシア社会を閉鎖的と見るべき論拠は得られない。上流富裕者層の存在が詩歌よりも知られる事は自明であるが、肝要なのは、それが特権身分層として自己を確立し得なかった事[1]、これである。そういったものの形跡はクセノパネス、ピンダロス、アルキロコス等よりは看取されない。サッポーやアナクレオンなどよりも知られるところであるが、生活、思想に亘って上流階級を下層民より隔てるものは小さい。上層は民を圧伏し得ず、民衆は政治的、社会的に発言権を保持した[2]。その事はテュルタイオスやまた「市民派」詩人の証するところであった。ポリスを全体として見れば、自由民の間における較差は小なりと言わずばなるまい[3]。

今日における支配的学説[4]については本論文冒頭において触れたが、以上の考察よりそれに対しては疑問を付せざるを得ない。もっとも、ここでは対象を抒情詩類に限定した。前古典期社会の一斑に触れたのみである。筆者の作業はこの他、アリストテレス論やクレイステネス

改革論程度であり、未だ僅少にとどまる。ただ、それらは本稿の結論と軌を同じくする。この事は今後の方向を示唆する。在来説は諸処にて破綻を来しているのではないか。他の要素をも勘考した場合、「古典学説」が全体として維持可能なのか否か、それが問われねばならない。

註

① シモニデスの詩に現れるテッサリアの豪族などは例外であろう。

② 参考までにソロンに関して贅言を連ねておく。
ソロン改革前の状況であるが、アテナイの富裕者は事実上多くの土地を兼併し、貧民は隷属した。もしも、この際、富裕者の試みが成功していたならば、アテナイにおいて閉鎖的身分が創出されたであろう。しかしその企図は蹉跌した。ソロンは調停者として重荷降し(セイサクテイア)を施行した。それは果敢なる方策であるが、当時、支持を受け実地に移し得た。これがギリシアのポリスではないか。後世、プラトンの如き人もソロンの立法措置には好意的である。ポリスにおいては自由人間における共同の意識がそれだけ強力なのであろう。

③ 五節註㉒参照。

④ 清永昭次「古典古代における貴族の特質――ギリシア・ポリス社会――」(『歴史教育』一一―八、昭和三八年、一〇―一六ページ)などその典型であろう。ここで示された解釈を「古典学説」と命名するのも可能ではあろう(芝川「アルカイオスとミュティレネ」五六ページ)。清永論文には貴族政から平民支配へなる発展論歴々たるものがある。しかしそれは抒情詩類からは裏付を得られない。それらの中には「滅びゆく貴族」や「勃興する平氏」など発見し難いのである。
猶、「貴族」、「平民」なる用語の使用には問題がある。上下の差異大なりという印象を与える虞れが生ず。「貴族」というよりも「上流階級、富裕者、エリート層」といった漠然たる呼称を宛てる方が現実に照応していよう。